

1	人みな花に 酔うときも 残雪恋し 山に入り 涙を流す 山男 雪解（ゆきげ）の水に 春を知る
2	ミヤマキリシマ 咲き誇り 山くれないに 大船（たいせん）の 峰を仰ぎて 山男 花の情を 知る者ぞ
3	四面山なる 坊がつる 夏はキャンプの 火を囲み 夜空を仰ぐ 山男 無我を悟るは この時ぞ
4	出湯の窓に 夜霧来て せせらぎに寝る 山宿に 一夜を憩う 山男 星を仰ぎて 明日を待つ
5	石楠花谷（しやくなげだに）の 三俣（みまた）山 花を散らしつ 篠分けて 湯沢に下る 山男 メランコリーを知るや君
6	深山紅葉（みやまもみじ）に 初時雨（はつしぐれ） 暮雨滝（くらさめたき）の 水音を 佇み聞くは 山男 もののあわれを 知る頃ぞ
7	町の乙女等 思いつつ 尾根の処女雪 蹴立てつつ 久住（くじゅう）に立つや 山男 浩然の気は 言いがたし

8	白銀（しろがね）の峰 思いつつ 今宵湯宿に 身を寄せつ 斗志に燃ゆる 山男 夢に九重（くじゅう）の 雪を蹴る
9	三俣の尾根に 霧飛びて 平治（ひじ）に厚き 雲は来ぬ 峰を仰ぎて 山男 今草原の 草に伏す

坊がつる讃歌のエピソード

「坊がつる讃歌」の作詞者の一人でもある梅木秀徳さんに、元歌を教えたのは葱花（ぎぼう）勲さんで、葱花さんが広島高等師範（現広島大学）に昭和14年に入学された後に新しくできた山岳部歌ということであられたようです。広島大学に残されている資料には、「山岳部第一歌・山男（昭和15年8月完成）」となっており、作詞：神尾明生 作曲：竹山仙史 編曲：芦立寛氏の名前が記載されておりました。しかし、原爆で古い資料が焼失し、これ以上の事がわからない時代が長く続きました。

昭和53年、栃木県の杉山浩さんがあるきっかけで、当時、地質鉱物学研究室の助手補に「神尾（かんお）さんなる人物がいた事を知り、千葉大学名誉教授（当時）…神尾明正氏が作詞者であることが発見されたのです。神尾さんは作曲者が誰なのかは知りませんが、「もしもしカメよ」や「荒城の月」でも歌えるように作詞した事や大山あたりをイメージに四季の山の情景を書いた記憶がある事を語っています。（昭和53年7月9日付、読売新聞）。

その2カ月後、今度は作曲者が判明しました。編曲の芦立寛さんの実姉の夫…宇都宮大学名誉教授（当時）武山信治さんがその人だったので。昭和15年の6月頃、芦立寛さんから、いい詩があるからメロディーをといて依頼の手紙をもらい、一晩で作ったそうです。「竹山仙史」は武山信治さんの書道の雅号で、このとき1回だけのペンネームだったそうです。